慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日英の属格構文における参照点関係の階層性について
Sub Title	On the hierarchical engagement of the reference-point relationships in the Japanese and English genitive constructions
Author	熊代, 敏行(Kumashiro, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2021
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.142 (2021. 2) ,p.1- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小屋逸樹先生・小瀬村誠治先生・ロバート・ギブソン先生退職記念特集号 論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000142-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日英の属格構文における参照点関係の階層性について*

熊　代　敏　行

1．初めに

この研究の目的は，英語の「NP *of* NP」構文の成立要件，及び意味構造を精査するとともに，日本語の「NP の NP」構文を同様に精査し，英語と比較対照することである。対象となる英語の先行研究としては，Langacker（1992, 1993）による「NP *of* NP」の分析を精査し，不十分な点を指摘する。日本語に関しては，西山（2003, 2013）の「NP の NP」の分析を同様に検証する。

Langacker は，英語の「NP *of* NP」の成立要件として，二つの NP の間に成立する内在性を挙げているが，この研究から得られる知見としては，この内在性は双方向的であることを指摘する。さらには，この構文には，参照点関係が関与しており，しかも異なる階層に属する二種類の参照点関係が関与していることを指摘する。続いて，この二種類の参照点関係が，同一の表現において同時的，かつ双方向的に介在可能であることを指摘する。さらには日本語に関しても，同様に二種類の参照点関係が存在し，同時的，かつ双方向的に介在しうることを指摘する。しかし，日本語には内在性に関する制約がないため，広い種類の NP の組み合わせが可能となると言える。

理論的知見の貢献としては，三点あり，一つ目は，参照点関係は，異なる階層から関与することが可能であり，その方向性は必ずしも一致しないというものである。そして，英語の「NP *of* NP」の *of*，および日本語の「NP の NP」の「の」は，意味の欠落した，統語的に規定される文法的要素ではなく，明確な意味を持つことを示す。さらには，この両者は，概略的な意味を記述しただ

けでは十分ではなく，プロトタイプが存在し，各用法が密接に関連する，カテゴリー構造を形成しているということも合わせて示す。

2．英語の「NP *of* NP」構文

2. 1. Langacker（1992）の分析

まず，Langacker（1992）による英語の「NP *of* NP」の分析から見ていくとしよう。概略的意味としては，（1）にあるように「二つの参与者の間の何らかの内在的関係を表す」というものである。

（1）概略的意味

“designating an intrinsic relationship of some kind between the two participants”（p. 487）

具体例としては，（2）にあるようなタイプ A から E の五種類となる[1)]。

（2）「NP *of* NP」の種別（pp. 485–486）

A. Part-whole: *the bottom of the jar*

B. Activity-participant: *the chirping of birds*

C. Entity-material: *a ring of gold*

D. Kin-ego: *the father of the bride*, *an acquaintance of Bill*

E. Type-token: *the state of California, a distance of 10 miles*

図 1 はプロトタイプと考えられるタイプ A の “part-whole” の意味構造を表したもので，図 2 は概略的意味である，二つの参照者の間に成立する内在的関係を表したものである。

ここで問題となるのが，どちらの NP がどちらの NP に対して内在的かということである。最初の NP が主要部（head），そして後続の NP が補部（complement），もしくは修飾部（modifier）として機能するわけであるが，どちらの NP が内在的なのかはタイプによりばらつきがあると言える。（3）を参照願

図 1:　プロトタイプ的意味

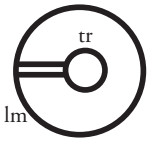


図 2:　概略的意味

◯　モノ
═　内在的関係
tr　＝トラジェクタ
lm　＝ランドマーク

いたい。

（3）どちらがどちらに対して内在的か

One participant is intrinsic to another.

（H ＝主要部，C ＝補部，M ＝修飾部）

A:　The part *bottom* (H), to the whole *jar* (C).[2)]

B:　The participants *birds* (C), to the activity *chirping* (H).

B': ??The participants *citizens* (C), to the activity *killing* (H).

C:　?The material *gold* (M), to the entity *ring* (H).

C': *The material *gold* (M), to the entity *cloth* (H).

D: ??The ego *bride* (C), to the kin *father* (H).

E:　The type *state* (H), to the token *California* (M).

例えば，タイプ A であれば，最初の NP であり，主要部である *bottom* が，後続の NP であり，補部である *jar* に対して内在的であるという関係になる。しかし，タイプ B では逆に，後続の NP であり，補部である *birds* が，最初の NP であり，主要部である *chirping* に対して内在的であるとなる。ここで注目すべきは，タイプ B の *birds* は *chirpring* に対して内在的であると問題なく言えるのに対し，ほぼ同等な表現であるタイプ B' の *citizens* は *killing* に対して内在的であるとは言いにくいということである。なぜならば，チュンチュンと鳴くのは鳥だと言えても，殺されるのは市民だとは，普遍的には断言できないからである。タイプ C' も同様に問題である。タイプ C の *gold* は *ring* に対して内在的であるとは言えても，はたしてタイプ C' の *cloth* に対して内在的であると言えるのかどうかである。金糸で折られている布というのは，なかなか思い浮かぶも

のではない。さらには，タイプ D においては，父親を思い浮かべて，嫁に行く娘に思いが行き着くことは，可能であってもそれ程容易であるとは言いがたい。

2. 2. Langacker（1992）の分析の修正

このように，（3）のすべてが完全には適格ではないため，修正が必要となる。新たに（4）を提案することとする。これは，「一方の参与者によって事例化される，概略的な『役割』が他方に対して内在的である」というものである。すなわち，一方の参与者の指示対象が直接的に内在的であるのではなく，それによって事例化されるような，概略的な「役割」が間接的に内在的であるという説明となっている。

（4）修正

The schematic role, instantiated by one participant, is intrinsic to another.

A: The part, by *bottom* (H), to the whole *jar* (C).[3)]

B: The participants, by *birds* (C), to the activity *chirping* (H).

B': The participants, by *citizens* (C), to the activity *killing* (H).

C: The material, by *gold* (M), to the entity *ring* (H).

C': The material, by *gold* (M), to the entity *cloth* (H).

D: The ego, by *bride* (C), to the kin *father* (H).

E: The type, by *state* (H), to the token *California* (M).

例えば，タイプ B であれば，*birds* そのものが *chirping* に対して内在的ということではなく，*chirping* という行為には参与者がつきもので，参与者という「役割」を果たす存在は，その行為に対して内在的であるというものである。このような一般化であれば，タイプ B' においても，容易に内在性を認定することが可能となる。すわなち，*killing* という行為に対して，その参与者という存在は内在的であるということである。タイプ C' も同様に問題が発生しない。すなわち，*cloth* という製品に対して，その材質自体は内在的であると問題なく言

える。タイプDにおいても，親族表現である *father* に対して，その人を父親に持つ人物の存在は内在的であるとするのは問題がない。さらには，タイプEにおいても，*California* という個別の名称に対し，その上位種別である概念は内在的であるとすることができる。

2. 3. Langacker（1993）の分析の精緻化

次に，この内在性という概念と参照点関係の関連性を考察することとする。Langacker（1993）は（5）のような関連性を指摘している。「ある事物が別の事物の性質の記述において内在的であればあれほど，参照点となる可能性が高まる」というものである[4)]。

（5）内在性と参照点関係の関連性

“the more intrinsically one entity figures in the characterization of another, the more likely it is to be used as a reference point for it”（p. 13）

（4）と（5）を元にすると，「NP *of* NP」構文における参照点関係は，（6）のようになると言える。「一方の参与者は，他方の参与者に事例化される，内在的，かつ概略的な『役割』に対しての参照点となる」というものである。

（6）提案

One participant serves as reference point for an intrinsic and schematic role, instantiated by another.

A: ?The whole *jar* (C), for its part (H), by *bottom*.[5)]

B: The activity *chirping* (H), for its participants (C), by *birds*.

B': The activity *killing* (H), for its participants (C), by *citizens*.

C: The entity *ring* (H), for its material (M), by *gold*.

C': The entity *cloth* (H), for its material (M), by *gold*.

D: The kin *father* (H), for its ego (C), by *bride*.

E: The token *California* (M), for its type (H), by *state*.

まず，タイプ A であるが，ここでは *jar* という全体を表す表現が参照点となり，その内在的部分に対する心的接触が可能になるという関係である。タイプ B とタイプ B' においては，*chirping* と *killing* という行為が参照点となり，その内在的参与者に対する心的接触が可能になる。タイプ C，及びタイプ C' では，*ring* と *cloth* という製品から，その内在的材質が喚起される。タイプ D では，*father* という親族表現から，その人を父親にもつ内在的存在が喚起され，タイプ E では，*California* という個別の名称がその上位種別である内在的概念を喚起する。

2. 4. Langacker（1993）の分析の問題点

しかし，（6）の「NP *of* NP」構文における参照点関係の認定は，*'s* を用いた所有構文における参照点関係とほぼ矛盾してしまうこととなる。（7）を参照願いたい。

（7）所有構文における参照点関係

A:　*the jar's bottom*

B: **chirping's birds*

B': **killing's citizens*

C: **the ring's gold*

C': **the cloth's gold*

D: **the father's bride*

E: **California's state*

John's car といった表現においては，Langacker（1993）は最初の NP が参照点となり，後続の NP がターゲットとなるという分析をしている。そうであれば，例えば，タイプ B において，*chirping* が参照点となり，その参与者に対して心的接触が可能になるため，*chirping's birds* と言えてしかるべきであるが，これは明らかに不可能である。同様に，タイプ C の *the ring's gold* も，タイプ D の *the father's bride* も，そしてタイプ E の *California's state* も，ここで意図した意味で

は，すべて表現として成立しない。

2. 5. 代　案

「NP *of* NP」構文と 's を用いた所有構文において，参照点関係の方向性が矛盾するという，この問題の解決策の糸口は，参照点構文には，大きく分けて二種類存在するという事実であると言える。Kumashiro（2016）は，参照点関係には，連続的参照点関係と同時的参照点関係の二種類があるとしている。（8）を参照願いたい。

（8）連続的 vs. 同時的参照点関係（Kumashiro 2016）

a. "In the **sequential** RPC, on the other hand, the two mental contacts are accessed sequentially in **two steps**. At processing cycle PC_1, the first mental contact with the reference point is processed by the conceptualizer; and at PC_2, i.e. the subsequent cycle, the second contact with the target is processed. As a result, the total time required to process the two mental contacts is **substantially longer** than that required for the simultaneous RPC" (p. 247)［強調は筆者］.

b. "In the **simultaneous** RPC［Reference-Point Construction: 筆者注］, the two mental contacts involved are processed in one step as a **single gestalt**, requiring a **limited** amount of processing time" (pp. 246–247)［強調は筆者］.

図 3 は連続的参照点関係を，そして図 4 は同時的参照点関係を図式化したものである。連続的参照点関係においては，二度の心的接触が連続的に二度の処理サイクルに分れて処理され，そのためプロセスするのに要する時間も相当長い。これに対し，同時的参照点関係においては，二度の心的接触が一度のステップにおいて，一つのゲシュタルトとして処理され，したがってプロセスするのに要する時間も非常に限定的となる。

この二種類の参照点関係が異なる階層において，「NP *of* NP」構文と関わっていると考えることができる。まず，動的な連続的参照点関係であるが，それは一方の参与者に関する百科事典的知識を含む多様な意味構造によって認定さ

図 3:　連続的参照点関係

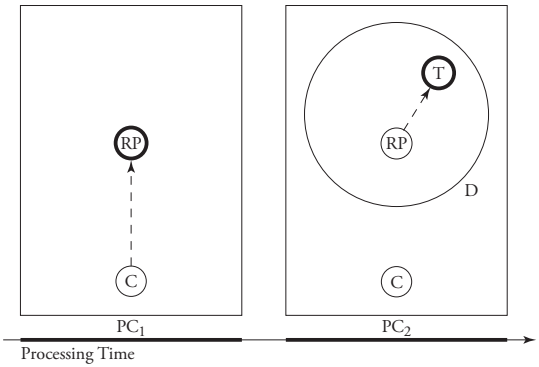
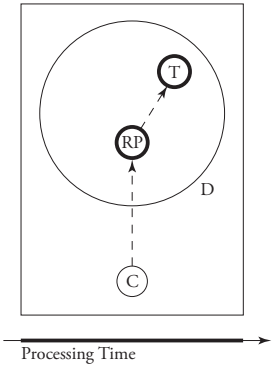


図 4:　同時的参照点関係

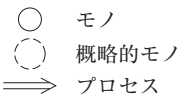


れる，別の類の内在的喚起可能性によるものであり，参照点関係は二者の参与者間に直接的に成立すると言える。そして，静的な同時的参照点関係であるが，それは関係を意味構造に含む一方の参与者に起因する内在的喚起可能性によるものであり，参照点関係は，関係を内包する参与者とその関係が喚起し，他方の参与者によって担われる役割との間に成立すると考えられる。

そして，この静的な同時的参照点関係であるが，その基盤になっているのは，構造の自律性と依存性という概念であると言える。この二つの概念の基本的な定義を（9）に示す。

図 5:　自律的構造

図 6:　依存的構造



（9）自律的 vs. 依存的構造（Langacker 1987）

a. **Autonomous** structure: “A semantic or phonological structure that ʼexists on its own,ʼ not presupposing another structure for its manifestation; e.g. vowels are autonomous relative to consonants” (p. 486).

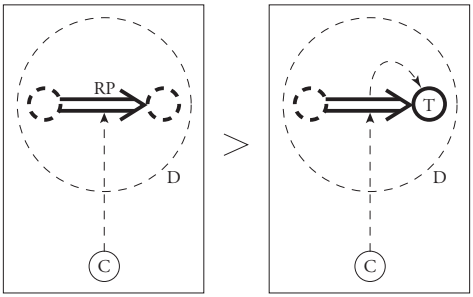
b. **Dependent** structure: “A semantic or phonological structure that presupposes another for its manifestation. Phonologically, consonants are dependent on vowels. Relations are conceptually dependent, since to conceive of a relation one must conceive (at least schematically) of the related entities” (p. 488).

図 5 は自律的構造であるモノの意味構造である。モノとは名詞表現が典型的に表す意味構造で，それだけで自己完結しており，他の概念が喚起されずとも，完結した意味構造を持っている。それに対し，図 6 は依存的構造であるプロセスを図式化したものである。プロセスとは動詞表現が典型的に表す意味構造であり，その意味が十分に喚起されるためには，そのプロセスに参加するモノ的な参与者が少なくとも概略的に喚起される必要がある。

具体的に，構造の自律性と参照点関係の間にどのような関連があるかを述べるとすると，依存的な構造が自律的な構造を義務的に喚起する場合，依存的な構造が参照点となり，自律的な構造が標点となりうるということである。しかし，逆に自律的な構造が依存的な構造を義務的に喚起することは決してなく，したがって自律性の相違のみによって，自律的な構造が参照点となり，依存的な構造が標点となることはないということが言える。図 8 では，依存的構造であるプロセスに最初に心的接触をし，そこで喚起された概略的参与者に対し，続いての心的接触をするという過程が描かれている。これに対し，図 7 では，自律的構造に対する心的接触は一度しかないことを表している。

図 7:　自律的構造における心的接触

図 8:　依存的構造における心的接触



では次に，個別の表現において，具体的にどの種類の参照点関係がどのように関わっているかを見ていくこととする。（10）は，動的な連続的参照点関係の関与をまとめたものである。

（10）連続的参照点関係：可

X serves as sequential reference point (SQRP) for its intrinsic entity Y.

B:　The participants *birds* (C), as SQRP, for their activity *chirping* (H).[6)]

B': The participant *Lincoln* (C), as SQRP, for its activity *assassination* (H).

C: The material *gold* (M), as SQRP, for its entity *ring* (H).

D: The ego *bride* (C), as SQRP, for its kin *father* (H).

E:　The token *California* (M), as SQRP, for its type *state* (H).

日本語でわかりやすく説明すると，タイプ B においては，百科事典的知識を用い，「鳥といえば，チュンチュンと鳴いたりするよね」，そしてタイプ B' で

は，「リンカーンと言えば，暗殺されたよね」という具合になる。さらには，タイプ C においては，*gold* でできたものを思い浮かべて，*ring* に辿り着くことは容易に可能であり，タイプ D においても，*bride* を思い浮かべて，その横で腕を組んでいる *father* を想起することも容易である。そして，タイプ E においても，*California* という名称を聞けば，それが *state* であるということは容易に想起される。

しかしながら，連続的参照点関係の関与は限定的であり，次の（11）の各例では関与を認定するのが困難であると言わざるをえない。

（11）連続的参照点関係：不可

B': *The participants *birds* (C), as SQRP, for their activity *walking* (H).

B': *The participants *citizens* (C), as SQRP, for their activity *killing* (H).

C': *The material *gold* (M), as SQRP, for its entity *cloth* (H).

D': ??The ego *bride* (C), as SQRP, for its kin *mother* (H).

E': ?The token *Los Angeles* (M), as SQRP, for its type *county* (H).

例えば，タイプ B' では，百科事典的知識を用い，「鳥と言えば，歩くよね」や「市民と言えば，殺されるよね」というのは，かなり不自然な感じを禁じえない。そして，タイプ C' においても，*gold* でできたものを思い浮かべて，*cloth* に辿り着くことは困難である。さらには，タイプ D' において *bride* から離れたところに着席しているであろう *mother* に，そしてタイプ E' において *Los Angeles* からそれが *county* の名前でもあることに辿り着くことも一定の困難を伴うと言える。

このように連続的参照点関係の成立が困難であるのに対し，同時的参照点関係は広範囲において，比較的容易に認定することができる。（12）を参照願いたい。

（12）同時的参照点関係：可（10 参照）

X serves as simultaneous reference point (SMRP) for an intrinsic and schematic role it

evokes, which is instantiated by Y.

A: The part *bottom* (H), as SMRP, for its whole (C), by *jar*.[7)]

B: The activity *chirping* (H), as SMRP, for its participants (C), by *birds*.

B': The activity *assassination* (H), as SMRP, for its participant (C), by *Lincoln*.

C: The material *gold* (M), as SMRP, for its entity (H), by *ring*.

D: The kin *father* (H), as SMRP, for its ego (C), by *bride*.

E: The token *California* (M), as SMRP, for its type (H), by *state*.

（10）の連続的参照点関係が可能な例と比較して（12）を見ると，それと平行して同時的参照点関係が成立していることが見てとれる。タイプ B とタイプ B' においては，*chirping* や *assassination* という行為が参照点となり，その行為の参与者が喚起される。タイプ C においては，材質を表す *gold* が参照点となり，その材質から作り出されるものが喚起される。タイプ D では，*father* という親族表現から，その人を父親にもつ人物が喚起され，タイプ E では，*California* という個別の名称から，その上位種別である概念が喚起される。

さらには，（11）の連続的参照点関係が不可能な例においても，同時的参照点関係が成立していることが次の（13）から見てとれる。

（13）同時的参照点関係：可（11 参照）

A': The whole *jar* (C), as SMRP, for its part (H), by *bottom*.

B': The activity *walking* (H), as SMRP, for its participants (C), *by birds*.

B': The activity *killing* (H), as SMRP, for its participants (C), *by citizens*.

C': The material *gold* (M), as SMRP, for its entity (H), by *cloth*.

D': The kin *mother* (H), as SMRP, for its ego (C), by *bride*.

E': The token *Los Angeles* (M), as SMRP, for its type (H), by *county*.

例えば，タイプ B とタイプ B' においては，*walking* や *killing* という行為が参照点となり，その行為の参与者が喚起されていると言える。

次に，「NP *of* NP」における参照点関係の関与を包括的に眺めると，同一の

表現において，最初の NP が参照点になる関係と後の NP が参照点になる関係が共存可能であると言える。（14）を参照願いたい。

（14）双方向的参照点関係

A: The part *bottom* (H), as SMRP, for its whole (C), by *jar*.
A: The whole *jar* (C), as SMRP, for its part (H), by *bottom*.
B: The participants *birds* (C), as SQRP, for their activity *chirping* (H).
B: The activity *chirping* (H), as SMRP, for its participants (C), by *birds*.
B': The participant *Lincoln* (C), as SQRP, for its activity *assassination* (H).
B': The activity *assassination* (H), as SMRP, for its participant (C), by *Lincoln*.
D: The ego *bride* (C), as SQRP, for its kin *father* (H).
D: The kin *father* (H), as SMRP, for its ego (C), by *bride*.

例えば，タイプ A においては，同時的参照点関係の関与によって，*bottom* という部分が参照点となり，全体を喚起するとも考えられるし，それと同時に *jar* という全体が参照点となり，部分を喚起するとも考えられる。さらには，タイプ B においては，連続的参照点関係の関与によって，百科事典的知識を用い，*birds* から *chirping* に辿り着くことができるとともに，同時的参照点関係の関与によって，*chirping* という行為からその行為者である *birds* を逆方向に喚起することも可能だと言える。続いて，タイプ B' においても，百科事典的知識を用い，*Lincoln* から *assassination* に辿り着くことができると同時に，同時的参照点関係の関与によって，*assassination* という行為からその行為者である *Lincoln* を逆方向に喚起することも可能だと言える。そして，タイプ D においても，百科事典的知識を用い，*bride* から *father* に辿り着くことができるとともに，同時的参照点関係の関与によって，*father* からその人を父親に持つ *bride* を逆方向に喚起することも可能だと言える。

したがって，英語の「NP *of* NP」構文には，連続的参照点関係と同時点参照関係の二種類が関与しているが，この二種類の参照点関係が同一の表現において同時的，かつ双方向的に介在することが可能であることが見てとれる。

3．日本語の「NP の NP」構文

3. 1. 西山（2003, 2013）による分析

続いて，日本語の「NP の NP」構文の分析に論を移すとしよう。西山（2003, 2013）では，（15）にあるような用法の分類が提案されている。

（15）西山の分類

a. タイプ A：《NP_1 と関係 R を有する NP_2》という意味をもつ。
例：「山田先生の本」，「洋子の首飾り」，「ピアノの音」

b. タイプ B：NP_1 は叙述名詞句（predicate nominal）である。NP_2 は NP_1 の表す属性が帰される対象を表している。
例：「画家の花子」，「女性の運転手」，「病気の母」，「危篤の父」

c. タイプ C：NP_1 が時間などの領域を指定し，その領域のなかで NP_2 の指示対象の断片を固定する。
例：「着物を着た時の母」，「大正期の東京」，「幼少期の雪舟」

d. タイプ D：NP_2 が非飽和名詞句でパラメータを含み，NP_1 がパラメータの値を固定する。
例：「芝居の主役」，「太郎の妹」，「小説の作者」，「火事の原因」，「父の癖」

e. タイプ E：NP_2 が行為名詞であり，対応する動詞の項構造と平行的な項構造をもつ。NP_1 がその項を埋めている。
例：「言語学の研究」，「この町の破壊」，「田中先生の忠告」

f. タイプ F：NP_2 が譲渡不可能名詞であり，NP_1 が NP_2 の基体を具現化する表現を表す。
例：「花子の手」，「家の玄関」，「部屋の窓」，「本の表紙」，「背広の袖」

g. タイプ G：「NP_2 は NP_1 だ」というウナギ文から派生した措定表現。
例：「ウナ重のお客」，「イブニングドレスの女性」，「胃潰瘍の叔父」

3. 2. 西山の問題点

（15）のような西山の分類は，認知言語学の視点からは問題があると言わざるをえない。まずは，各分類間の関係が示されておらず，単なる異なる分類の列挙にとどまっているにすぎないということである。さらには，すべての分類に共通する概略的共通点，もしくは一部の分類の共通点も提示されていないという問題も合わせて存在する。

3. 3. 分　析

それでは，認知言語学の枠組みでは，どのような分析を提示することができるかを提示することとしよう。下の（17）は，日本語の「NP の NP」構文において，同時的参照点関係と連続的参照点関係がどの用法において，どのように関与しているかを個別に考察したものである。（16）は，この（17）に対する注釈となる。

（16）注釈

a.「可分所有（タイプ A)」のような表記は，当該の用法が西山の分析のどの分類に**おおまかに**該当するかを示す[8)]。

b. H は主要部（head），M は修飾部（modifier），C は補部（complement）を表す。

c. 単線矢印（→）は，同時的参照点関係に基づいた参照点関係を表す。二重線矢印（⇒）は，連続的参照点関係に基づいた参照点関係を表す。

d. 矢印の方向は，参照点関係における心的接触の方向を表す。その数は参照点関係の関与の度合いを表し，数が**少ない**ほど直接的な**強い**度合いを表す。

e. セミコロン（；）に続く例は，西山にはないもの，下線の引いてある例は，Langacker（1992）の「NP *of* NP」の用例を日本語にしたものである。

f. 説明文の中に「役割を喚起する」とある場合は，同時的参照点関係のことを表す。

g. 説明文の中に，「直接想起させる」とある場合は，連続的参照点関係のことを表す。

（17）分類

a. 可分所有（タイプ A）：H を介して C に十分に心的接触が可能。所有物を表す H がその所有者であるという C の役割を喚起（←←）。さらには，C が H を同時に直接想起させることもあり（⇒⇒，⇒⇒⇒）。
例：「山田先生←← | ⇒⇒⇒本」，「洋子←←首飾り」；「弘法大師←← | ⇒⇒筆」

b. 不可分所有（タイプ F）：H を介して C に容易に心的接触が可能。部分を表す H がその全体であるという C の役割を容易に喚起（←，←←）。しかし，C も H の役割を同時に十分に喚起（→→，→→→）。さらには，C が H を直接想起させることもあり（⇒⇒）。
例：「花子← | →→→手」，「家← | →→玄関」，「部屋← | →→窓」，「本← | →→表紙」，「背広← | →→袖」，「ピアノ←← | →→音」；「手タレ←← | →→⇒⇒指」，「瓶← | →→底」

c. 役目（タイプ D）：H を介して C に容易に心的接触が可能。役目を表す H がその基体であるという C の役割を容易に喚起（←，←←）。しかし，C が H の役割を同時に喚起（→→，→→→）することもあり。さらには，C もしくは H が他方を直接想起させることもあり（⇐⇐⇐，⇒⇒）。
例：「芝居← | →→主役」，「太郎←妹」，「小説← | →→作者」，「火事← | →→→原因」，「父←癖」；「ノルウェーの森⇐⇐⇐←← | →→⇒⇒村上春樹」，「花嫁← | ⇒⇒父」

d. 行為（タイプ E）：H を介して C に容易に心的接触が可能。行為を表す H がその参与者であるという C の役割を容易に喚起（←）。しかし，そ

の程度は弱いが，C が H の役割を同時に喚起することもあり（→→→）。さらには，C もしくは H が他方を直接想起させることもあり（⇐⇐，⇐⇐⇐，⇒⇒）。

例：「言語学← | →→→研究」，「この町←破壊」，「田中先生←忠告」；「恩師← | →→→助言」，「鳥⇐⇐← | ⇒⇒さえずり」，「リンカーン⇐⇐⇐← | ⇒⇒暗殺」

e. 属性（タイプ B）：M を介して H に十分に心的接触が可能。属性を表す M がその帰属先であるという H の役割を喚起（→→）。しかし，その程度は弱いが，H も M の役割を同時に喚起する（←←←）こともあり。さらには，M が H を直接想起させることもあり（⇒⇒）。

例：「画家→→花子」，「女性←←← | →→運転手」，「病気→→母」，「危篤→→父」；「胃ガン←←← | →→患者」，「金→→⇒⇒指輪」

f. 時間（タイプ C）：M を介して H に容易に心的接触が可能。時間を表す M がその時間に存在する事物という H の役割を喚起（→）。しかし，まれではあるが，H が M の役割を同時に喚起することもあり（←←←）。さらには，M もしくは H が他方を直接想起させることもあり（⇐⇐⇐，⇒⇒）。

例：「着物を着た時→母」，「大正期←←← | →東京」，「幼少期→雪舟」；「ジュラ紀⇐⇐⇐ | →⇒⇒恐竜」

g. M/C か H のどちらかを介して他方にどうにか心的接触が可能。M/C や H が何を表すか，そしてどういう役割を喚起するか，もしくは何を直接想起させるのかについての指定なし。

例：「山田先生←←←← | ⇒⇒⇒⇒本」，「洋子←←←← | ⇒⇒⇒⇒首飾り」，「ピアノ←←←← | ⇒⇒⇒⇒音」，「ウナ重←←←← | ⇒⇒⇒⇒お客」，「イブニングドレス←←←← | ⇒⇒⇒⇒女性」，「胃潰瘍⇒⇒⇒⇒叔父」；「きのう⇒⇒⇒⇒車」

(17)a の「可分所有」用法では，後続の NP である主要部を介して先頭の NP である補部に十分に心的接触が可能であり，所有物を表す主要部がその所有者であるという補部の役割を喚起すると言える。例にあげられている「山田先生の本」では，所有物である「本」がその所有者であるという「山田先生」の役割を喚起すると考えられる。さらには，補部が主要部を同時に直接想起させることもあり，「弘法大師の筆」では，「弘法大師と言えば，筆」がすぐに思い浮かぶであろう。

続いて，(17)b の「不可分所有」用法においても，後続の NP である主要部を介して先頭の NP である補部に容易に心的接触が可能であると言え，部分を表す主要部がその全体であるという補部の役割を容易に喚起している。例にある「花子の手」では，部分である「手」がその全体であるという「花子」の役割を喚起する。しかし，それに加え，補部も主要部の役割を同時に十分に喚起すると言えるのである。例えば，「家の玄関」では，「家」がその重要な部分である「玄関」を喚起するとも言えよう。さらには，補部が主要部を直接想起させることもあり，「手タレの指」では，「手タレと言えば，指」が思い浮かぶと言える。

(17)c では，「役目」用法が示されており，ここでも後続の NP である主要部を介して先頭の NP である補部に容易に心的接触が可能であり，役目を表す主要部がその基体であるという補部の役割を容易に喚起する。例えば，「芝居の主役」では，役目を表す「主役」がその基体である「芝居」を喚起する。しかし，補部が主要部の役割を同時に喚起することもあり，例えば「小説の作者」においては，「小説」が「作者」を喚起するとも言える。さらには，補部もしくは主要部が他方を直接想起させることもある。「ノルウェーの森の村上春樹」では，「ノルウェーの森と言えば，村上春樹」，「村上春樹と言えば，ノルウェーの森」の両方が可能であろう。

さらには，(17)d の「行為」用法においても，後続の NP である主要部を介して先頭の NP である補部に容易に心的接触が可能であり，行為を表す主要部がその参与者であるという補部の役割を容易に喚起するという構造になってお

り，例中の「言語学の研究」では，行為を表す「研究」がその参与者であるという「言語学」の役割を喚起している。しかし，その程度は弱いが，補部が主要部の役割を同時に喚起することもあり，「言語学の研究」では，「言語学」から「研究」を想起することも可能である。さらには，補部もしくは主要部が他方を直接想起させることもあると言え，「鳥のさえずり」では，「鳥と言えば，さえずり」，「さえずりと言えば，鳥」の両方が言える。

次に，(17)e の「属性」用法では，上述の用法とは異なり，先頭の NP である修飾部を介して後続の NP である主要部に十分に心的接触が可能となっている。属性を表す修飾部がその帰属先であるという主要部の役割を喚起するという関係になっており，例の「画家の花子」では，属性を表す「画家」がその帰属先であるという「花子」の役割を喚起する。しかし，その程度は弱いが，主要部も修飾部の役割を同時に喚起することも可能で，「胃ガンの患者」では，帰属先である「患者」から，「胃ガン」であれ何であれ，その属性である病気を想起することは可能である。さらには，修飾部が主要部を直接想起させることもあり，「金の指輪」では，「金と言えば，指輪」という言い方は十分可能である。

(17)f の「時間」用法においても，先頭の NP である修飾部を介して後続の NP である主要部に容易に心的接触が可能である。時間を表す修飾部がその時間に存在する事物という主要部の役割を喚起し，「大正期の東京」では，「時間」を表す「大正期」がその時代の何かの事物を喚起し，それが「東京」に該当している。しかし，まれではあるが，主要部が修飾部の役割を同時に喚起することもあり，「大正期の東京」では，「東京」から様々な過去の時代を想起することは可能である。さらには，修飾部もしくは主要部が他方を直接想起させることもある。「ジュラ紀の恐竜」では，「ジュラ紀と言えば，恐竜」，「恐竜と言えば，ジュラ紀」の両方が可能である。

最後に (17)g の「遠方」用法では，補部（もしくは修飾部）か主要部のどちらかを介して他方にどうにか心的接触が可能であると言える。補部（もしくは修飾部）や主要部が何を表すか，そしてどういう役割を喚起するか，もしくは何を直接想起させるのかについての指定はないと考えるのが妥当であろう。

例にある「山田先生の本」では，「山田先生」は所有者や作者ではなく，「山田先生が昨日話をしていた本」といった，非常に関係が薄い解釈も可能であり，「洋子の首飾り」では，「洋子」が所有者や製作者ではない場合も考えられよう。

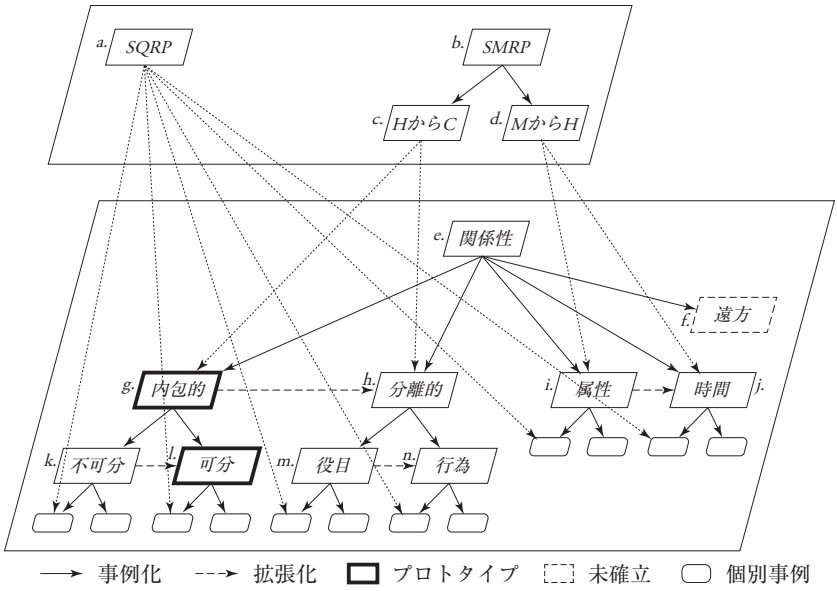
（17）の分析から認められる，日本語の「NP の NP」構文の特徴をまとめると，日本語においても，同時的参照点関係と連続的参照点関係という二種類の参照点構造が存在すると言える。さらには，日本語においても，その二種類は同時的，かつ双方向的に介在が可能であると結論付けることができる[9)]。

4．カテゴリー構造

4. 1. 日本語の「NP の NP」のカテゴリー構造

では，次に（17）の分析をもとに，日本語の「NP の NP」構文のカテゴリー構造を見ていくこととする。図 9 を参照願いたい。まず，図 9e のスーパースキーマであるが，これは，二つの NP の間に何らかの関係性が認定されるという概略的共通点を表す。このスキーマに対しては，五つの下位スキーマ，もしくは配下の用法が存在する。図 9g の「内包的」の下位スキーマは，最初の NP である補部そのもの，もしくはその支配領域内に後続の NP である主要部が存在しているという共通点を表し，図 9k の「不可分所有」用法と図 9l の「可分所有」用法を配下に置く。そして，図 9h の「分離的」の下位スキーマは，最初の NP と後続の NP は互いから完全に分離して存在しているという共通点を表し，図 9m の「役目」用法と図 9n の「行為」用法を配下に置く。さらには，図 9i の「属性」用法は，最初の NP である修飾部が後続の NP である主要部の属性を表すという共通点を表し，図 9j の「時間」用法は，最初の NP が後続の NP が存在する時間を表すという共通点を表している。続いて，図 9f の「遠方」用法であるが，これは，確立した用法ではなく，図 9e のスーパースキーマに直接認証され，繰り返し使われることのない，一時的な用法とすべきものである。この日本語の「NP の NP」構文が構成するカテゴリーにおけるプロトタイプ的スキーマ，及び用法は，図 9g の「内包的」のスキーマ，そ

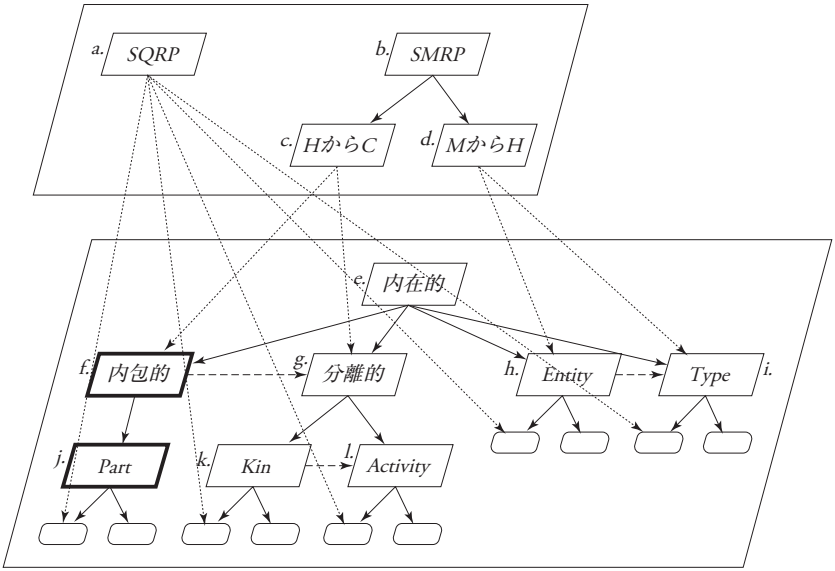
図 9:　日本語の「NP の NP」のカテゴリー構造



して図 9l の「可分所有」用法であると考えられる。

このような基本的な用法を構成する階層が存在するのと同時に，参照点関係の介在を表す別の階層も存在している。この別の階層には，図 9a の連続的参照点関係のスキーマ（SQRP）が存在し，一方の参与者から他方の参与者に対して直接的に連続的参照点関係が成立するという共通点を表す。さらには，図 9b の同時的参照点関係のスキーマ（SMRP）も存在し，一方の参与者から他方の参与者の役割に対して間接的に同時的参照点関係が成立しているという共通点を表している。このスキーマに対しては，二つの下位スキーマが存在する。図 9c の「H から C」の下位スキーマは，後続の NP である主要部（H）を介して最初の NP である補部（C）に心的接触が可能であり，主要部が補部の役割を喚起するという共通点を表す。図 9d の「M から H」の下位スキーマは，最初の NP である修飾部（M）を介して後続の NP である主要部（H）に心的接触が可能であり，修飾部が主要部の役割を喚起するという共通点を表す。

図 10:　英語の「NP *of* NP」のカテゴリー構造



そして，これらの参照点関係を表すスキーマは下の階層に存在するスキーマ，用法，もしくは個別事例を認証している[10]。同時的参照点関係を表す図 9c の「H から C」のスキーマは下の階層の図 9g の「内包的」のスキーマと図 9h の「分離的」のスキーマを認証している。図 9d の「M から H」のスキーマは下の階層の図 9i の「属性」用法と図 9j の「時間」用法を認証している。これに対し，図 9a の連続的参照点関係のスキーマは，下の階層のスキーマやその配下の用法を介さず，個別事例を直接に認証している。例えば，図 9g の「内包的」のスキーマやその配下の図 9k の「不可分所有」用法を認証するのではなく，その下に存在している個別事例の一部を認証しているのである。

4. 2. 英語の「NP *of* NP」のカテゴリー構造

このような日本語の「NP の NP」構文のカテゴリー構造を基準として，英語の「NP *of* NP」の構造を考えてみることとしよう。この二つの構造は相似しているが，英語には，内在性の要件が存在しているため，限定的な構造にな

っていると言える。図 10 を参照願いたい。

まず特筆すべきは，日本語の図 9f の「遠方」用法に相当する用法は存在しないということである。続いて，図 10f の「内包的」のスキーマの配下の用法としては，“part-whole” 用法のみが存在し，図 9l に相当する「可分所有」用法が欠落している。例えば，「ジョンの友だち」に対応する英語表現は，*a friend of John* ではなく，*a friend of John's* となり，*'s* がつく。この際，Langacker（1993:15）によれば *John's* はジョンの所用物の全体を表していると考えられ，そうであれば，“part-whole” の関係を表す不可分所有とするのが妥当であると考えられる。さらには，図 10l の “activity-participant” 用法における参与者は，日本語の図 9n の「行為」用法とは違い，対応する自動詞の主語，もしくは他動詞の直接目的語に限定される。日本語では，対応する他動詞の主語に相当する行為者に対して「の」を使い，例えば「ラネカー**の** *of* の分析」と言うことができるが，英語では *an analysis of* of ***of*** *Langacker* とは言えず，*an analysis of* of ***by*** *Langacker* というように *of* の代わりに *by* を使う必要がある[11)]。そして，図 10h の “entity” 用法も，図 9i の「属性」用法とは違い，内在的な属性に限定される。さらには，図 9j の「時間」用法は存在せず，代わりに図 10d の「M から H」に認定される用法としては，図 10i の “type-token” 用法が存在する。

5．結　論

最後に，本研究における理論的知見をまとめることとする。参照点関係は，異なる階層から関与することが可能であり，その方向性は必ずしも一致しない。さらには，英語の「NP *of* NP」の *of*，および日本語の「NP の NP」の「の」は，意味の欠落した，統語的に規定される文法的要素では決してなく，明確な意味を持つ。そして，この両者は，概略的な意味を記述しただけでは十分ではなく，プロトタイプが存在し，各用法が密接に関連する，カテゴリー構造を形成していると言える。

注

＊　この論考の内容は，慶應意味論・語用論研究会，東京大学「文法の意味」研究会，第 21 回日本認知言語学会で発表したものを元にしたものである。それぞれの研究会の主催者である西山祐司先生，西村義樹先生，そして，それらの会の参加者からの貴重な助言に感謝の意を述べたい。そして，この論考の研究は慶應義塾学事振興資金の補助を受けて行われたものであることを付記しておく。

1）“Part-whole” などの見出しは筆者による。

2）ここでの各タイプにおける表記は省略的なもので，例えばタイプ A の省略しない場合の表記は，“The part *bottom* (H) is intrinsic to the whole *jar* (C)” となる。

3）ここでのタイプ A の非省略時の表記は，“The schematic part, instantiated by *bottom* (H), is intrinsic to the whole *jar* (C)” となる。

4）（5）における代名詞 *it* の先行詞を何とするかの解釈は容易でないことに注意願いたい。*it* が二つ存在しているが，その両方が同じ先行詞をとることは，意味的に不可能である一方，それぞれがどの別の名詞句を先行詞をとるかの判断は一筋縄ではいかない。*one entity* は前置された従属節の主語であるので，主節の主語である *it* の先行詞としては通常はふさわしい。しかし，前後の文脈を勘案すると，文の構造上困難を伴うが，*another* を先行詞とせざるをえない。したがって，「事物 A が事物 B の性質の記述において内在的であればあれほど，事物 B がその内在的性質である事物 A の参照点となる可能性が高まる」という解釈となる。

5）ここでのタイプ A の非省略時の表記は，“The whole *jar* (C) serves as reference point for its intrinsic and schematic part (H), instantiated by *bottom*” となる。

6）ここでのタイプ B の非省略時の表記は，“The participants *birds* (C) serve as sequential referece point (SQRP) for their intrinsic activity *chirping* (H)” となる。

7）ここでのタイプ A の非省略時の表記は，“The part bottom (H) serves as simultaneous reference point (SMRP) for its intrinsic and schematic whole (C) it evokes, which is instantiated by *jar*” となる。

8）この対応関係はあくまでもおおまかなもので，西山の分類とは正確に合致しない。例えば，(17)b の「不可分所有」には，「ピアノの音」が入っているが，これは西山ではタイプ A に属するとされる。ここでは，抽象的な所有も含めることとし，不可分所有に分類する。そして，(17)e の「属性」には，「金の指輪」が入っているが，これは「金である指輪」という言い換えが難しいため，西山ではタイプ B には含まれない。

9）認知文法の枠組みによる「NP の NP」構文の意味構造に関する特筆すべき先行研究として，Nomura（2000）がある。しかし，基本的に Langacker（2002, 2003）の英

語の「NP *of* NP」の分析を踏襲しており，二種類，かつ双方向的参照点構文の認定には残念ながら至っていない。

10）図 9，そして次の図 10 において，点線矢印は，上の階層から下の階層に対しての事例化を表す。

11）日本語において，対応する他動詞の主語を必ず「の」を使って表すことができるかというと，そうではない。「オズワルドのケネディーの暗殺」や「アメリカの原爆の投下」は座りがわるく，最初の「の」を「による」に変えた方が格段によくなる。逆に，自然な例を追加すると，「キューリー婦人のラジウムの発見」や「エディソンの蓄音機の発明」などは，「の」でも全く問題ない。これらの例を比べると，最後の名詞句が抽象的行為ではなく，行為から派生した特定の物理的な存在を指し示すことが可能であり，その物質と行為者の間に何らかの所有関係が認定できる場合には，行為者に対して「の」を使用することが容易になると推定される。

引用文献

Kumashiro, Toshiyuki.（2016）. *A Cognitive Grammar of Japanese Clause Structure.* Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W.（1987）. *Foundations of Cognitive Grammar,* Volume 1, *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W.（1992）. The Symbolic Nature of Cognitive Grammar: The Meaning of *of* and of *of*-Periphrasis. Martin Pütz（ed.）, *Thirty Years of Linguistic Evolution: Studies in Honour of René Dirven on* the Occasion of His Sixtieth Birthday, 483–502. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W.（1993）. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4.1–38.

Nomura, Masuhiro.（2000）. *The Internally-Headed Relative Clause Constructions in Japanese: A Cognitive Grammar Approach.* Doctoral Dissertation. University of California, San Diego.

西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』，ひつじ書房。

西山佑司（2013）「ウナ重のお客さんについて」．西山佑司（編），『名詞句の世界：その意味と解釈の神秘に迫る』，103–122．ひつじ書房。